

オープン・ラーニングの実験

- SCS 短期講座の実施結果 -

池田 輝政, 瀬田 智恵子, 苑 復傑, 宮本 友弘

放送教育開発センター

The Space Collaboration System: Short Program on Women and Social Participation

Terumasa Ikeda, Chieko Seta, Fujie Yuan, Tomohiro Miyamoto

National Institute of Multimedia Education

Abstract The Space Collaboration System (SCS) has been developed by the Ministry of Education since 1996, networking VSAT (Very Small Aperture Terminal) stations set within higher education institutions. The National Institute of Multimedia Education (NIME) plays a role as a hub station as well as a VSAT station. We designed a pilot project, named the SCS Short Program to study: (1) what problems do we find in extending interactive distance learning as a VSAT station for the students of SCS networking universities and (2) how can we contribute to improving the educational effectiveness of SCS programs. The theme of the program was “Women and Social Participation”, with a series of three sub-themes: “What are Hurdles for Women?”, “Hurdles for Men?” and “To Get Over Hurdles”, inviting two journalists (a female and a male) and a university professor specializing in gender studies. As a result of our experiment, we reached the following conclusions. The SCS Program initiated by NIME could be effective for (1) liberal arts-related programs focused on contemporary/practical issues, (2) vocational/job training programs, e.g., media literacy for faculty staff, (3) continuing-education programs for professionals and (4) career transfer programs to improve working life, while universities could provide regular credit programs and non-credit supplementary programs, networking with certain colleague universities. For the improvement of the SCS program, we might recommend that we make the best use of SCS’s dual characteristics — it is “interactive function” as a system on the one hand, and “real time function” as a medium on the other hand.

1. はじめに

平成8年10月から文部省は通信衛星を活用した高等教育機関間の教育交流ネットワーク事業を実施に移した。この事業はスペースコラボレーションシステム(SCS: Space Collaboration System)と呼称されて、各大学等がそれぞれVSAT局(小型衛星地球局, Very Small Aperture Terminal)という衛星ターミナル局となって遠隔の教育・研究

交流を自由に行うことが可能となった。

放送教育開発センターはVSAT局の一員でもあり、同時に、それぞれのVSAT局のネットワークの中央局(HUB局)としてシステムの管理と運用を行っている。今回のわれわれの実験プロジェクトはSCS短期講座という名称で実施したが、その狙いは、(1)放送教育開発センターが主体的にVSAT局の一つとなって他の大学と双方向の遠隔講座を行うには、どのような問題があるのかを探

ること,(2)通信衛星の教育利用を効果的にするためには,どのような問題があるかを明らかにすること,の2点であった。

本論文では,SCS 短期講座の実験について講座スペックの設計,実験のプロセス,実験結果の評価を紹介し,上記の2つの研究目的に対して明らかとなった事項を整理し,今後の課題を考察する。

2. SCS 短期講座の設計

2.1 講座テーマの企画

SCS という衛星メディアの特徴は,ある一つの VSAT 議長局が離れた場所にある他の多数の VSAT 子局と互いの映像・音声を双方向でやりとりできる点にある。一言で述べれば,特定の1議長局対任意の1子局のリアルタイムの双方向性が実現できるという特徴をもっている^(注1)。

しかし,そのメディアの特徴を知ったとしても,教員がそれをどう使いこなすかは別の問題である。とくにメディア技術に疎い教員はコミュニケーションする内容をもってはいても,使うという動機や意欲に乏しいし,それが内発的に強化されることはにはわかには期待できないことがよく指摘されている。

この問題の克服は放送教育開発センターで研究するわれわれに課せられたテーマでもあるが,その課題解決の方法論をつくるために教育内容,教育方法,メディア技術のそれぞれに専門的な知識・技能をもつチーム^(注2)を試みに編成することにした。

チームの構成メンバーには講座内容に関する講師役も参加させる方向で検討されたが,今回は企画チームとしての性格づけを重んじたため,講師役はあくまで企画者にとって「演じる人」という位置づけで合意した。この結果,今回は本論文の執筆者4名によってチームが構成された。

さて,放送教育開発センターがVSAT議長局として独自の大学間教育交流の役割を果たすには,

何よりも大学や学習者のニーズに対応した講座のテーマ選定が大事である。しかしながら,今回は実験プロジェクトであるので,受講生はあくまでモニターあるいは被験者としての役割を担うことになる。

したがって,特定の大学や学習者のニーズに応える講座テーマとすることはできないので,(1)選定する講座のテーマが広く社会的なニーズに裏打ちされていること,(2)個別大学の授業科目として開講するには講師等の条件で困難な講座テーマであること,の2点をその選定条件とした。

この結果,講座企画者のメンバーである瀬田の専門性を活用すること,国際的なテーマとして社会的に認知されていること,かつ各大学での関連開講科目の少ないテーマということで,「女性と社会参画」を講座テーマとした。

この趣旨にそって,モニター受講生を募集する各VSAT局が検討されたが,実験群としては講座テーマに関連する開講科目が充実していないという理由で理科系のVSAT局が選ばれ,その比較群という視点から総合大学のVSAT局を加えることにした。

2.2 講座スペックの作成

つぎに「女性と社会参画」講座の狙いを検討した。討議の結果,先進国のなかでも,「男は仕事,女は家庭」という男女の役割分担意識が,とりわけ根強く残っているとわれ,国際社会での社会常識を問われていることもある日本社会の現況に照らせば,「受講者が,まだまだ日本はジェンダーにとらわれすぎている社会であることやその不自然さに気づくこと」が効果として狙われてよいという結論に達した。何かの知識や技能を身につけるという目標もあれば,今回の講座のように社会的感受性(social sensitivity)を喚起する目標も高等教育として必要という判断である。

この目標設定に基づき,その効果が生じるように「『女性と社会参画 - 女のハードル,男のハードル』の講義内容及び進め方」と題する講座ス

ペックの設計が話し合われた。これと並行して講師の選定と交渉が進められた。

講座スペックを描く際に留意された点は、以下の通りであった。

- (1) 1回の講座では印象が薄くなるので短期連続型にする,
- (2) 従来の講座や授業時間の長さにとらわれず, 受講者にとって適切な時間に配慮する,
- (3) 短期講座であっても内容にバラエティと完結性(学問的な体系性は求めない)が必要である,
- (4) そのためには講師は, 現役のジャーナリスト(共同通信社の松本侑壬子氏と読売新聞社の山口正紀氏)と大学教師(大阪大学の伊藤公雄氏)のリレー方式にする,
- (5) 受講生とのコミュニケーションを必須事項とするために, 各講師には自己紹介と質問を含む呼びかけを行ってもらう,
- (6) 事前に受講者に配付するために, 当日話す内容に関連する印刷教材(図表を含む)を各講師に準備してもらい, 大事な知識は後で受講者がフォローできるようにする,
- (7) 図表を含むすべての教材はメディアを通しては提示しないことにする,
- (8) 講座の目標に対する評価は3回目の講座が終了後に10分~15分程度の短いアンケート票で行う。

2.3 講座スペックの実例

検討の結果できあがった『女性と社会参画 - 女のハードル, 男のハードル』の講義内容及び進め方」と題する講座スペック案に基づき, 講師に面会して説明を行い, 修正事項を盛り込んで最終の講義スペックを作成した。その目次構成と実例(一部)を以下に示す。

【講座スペックの目次構成例】

(1)SCS 短期講座の構成

講座の狙い, 3回講義からなる全体の内容構成

を説明した。

例:「内容構成は, まず1, 2回の講義では女性と男性のジャーナリストから体験的事例を紹介してもらい, そのハードルをどのように乗り越えてきたかを提示する。最後の3回目は, 先の2回目の講義を踏まえて, それらの内容をジェンダー分析の学問的観点からとらえるといったようなことなのか, ジェンダーバイアスを小さくしていく上で, 皆がどのようなことに気をつけていかなければいけないのか, その手がかりを提示する。」

(2) 講師の講義内容のポイント

各講師ごとに講義内容の要点を説明した。

例:「第1回講義(松本講師)ジャーナリズムの組織の一員として, 職業生活を持ち続けるなかで, 『男社会のなかの女性』ゆえに体験した問題, それを克服するための発想の転換, 後輩に願うことなどをジャーナリストの目に映った『女のハードル』に重点をおいて話してもらう。また受講者とのコミュニケーションをデスクッションによって行う。」

(3) 各回の講義シナリオ

講義の進め方を示した。

例:「第1回講義, 第2回講義 共通形式
(松本講師, 山口講師)

(a) パート 導入 20分

- ・自己紹介(現在の仕事, 仕事の内容, 日常生活など)
- ・学生からの自己紹介(専攻, 日常生活, 将来の希望など)
- ・職業観, 結婚観, 家庭観を切り口にして学生との意見交換(パートにつなげていくための手がかりとする)

(b) パート 私の職業生活の転機を語る 20分

- ・受講生の考え方もふまえて, 自身の職業生活のなかで感じた不安, 疑問などを交えながら, 『問題』を克服するための発想の転換, ものの見方, 学生に期待することなどを話す。(話しの途中で, 質問などを受けることも配

表1 SCS 短期講座『女性と社会参画』の日程

講義内容	講師	時間帯	教材と評価
何が女性にとってハードルになっているのか	松本 侑子 (共同通信社)	平成8年11月20日 午後6時~7時	講師作成の印刷教材を事前に配布
何が男性にとってハードルになっているのか	山口 正紀 (読売新聞社)	平成8年11月21日 午後6時~7時	講師作成の印刷教材を事前に配布
ハードルを越えるために	伊藤 公雄 (大阪大学人間科学部)	平成8年11月22日 午後6時~7時	講師作成の印刷教材を事前に配布

慮する。)」

(4) 講座用資料(印刷教材)の内容

講義で言及する資料や情報についての要望事項を提示した。そのなかには、形式は自由であるが、講師の経歴、職業生活のトピック、関連データを含めることとした。当初、「女性問題」理解のための主な用語の周知度チェックリスト、受講者の職業観・結婚観・家庭観・役割分担意識を講義のなかで確認するためのワークシートも挿入することを検討したが、講師の集中力が低下することなどを避けるために、採用しなかった。

(5) 講座評価用アンケート

アンケートの内容については4.2で詳述するが、その内容は大きく分けて、SCSというシステムを利用した講座の評価、および講座のテーマ・内容の効果に関する評価を把握できるように設計した。

3. 短期講座の実験プロセス

3.1 VSAT子局の協力大学と実験作業

実験プロジェクトの実行にはVSAT議長局とVSAT子局との打ち合わせが大事になる。今回の場合はVSAT子局は、教育交流の相手先としての

位置づけではなくて、放送教育開発センターの実験のモニター校という位置づけであったので、各大学のSCS委員会に対して協力依頼を行った。この結果、最終的には北海道大学、東京農工大学、長岡技術科学大学、大阪大学の4校の協力を得ることができた。

実行に際して必要となった作業は以下の通りであった。作業は6月に準備を開始して、11月下旬の実施までほぼ6カ月を要した。

- (1) 講師に関する手続き：講座スペックの作成、講師の選定と決定、講師との事前打ち合わせ、印刷教材の依頼と編集、本番での講師への技術的サポート及び進行補助、ビデオ収録、講座終了後の反省会。
- (2) モニター受講者に関する手続き：募集ポスター・案内パンフレットの作成、協力校への募集窓口事務の依頼、受講者名簿の作成、印刷教材郵送。
- (3) VSAT子局の作業：募集・案内窓口事務、当日の会場管理とSCS機器操作、ビデオ収録、当日の評価アンケートの実施と回収。

3.2 講座の進行と当日のサンプル画像

講座の進行は表1に示した日程にそって行った。講義内容はリレー方式による3日連続型であ

表2 協力大学(VSAT子局)と受講者数

大学名	全受講者(男,女)	3日連続受講者(男,女)
北海道大学	3(1, 2)	1(1, 0)
長岡技術科学大学	1(1, 0)	1(1, 0)
東京農工大学	21(6, 15)	12(5, 7)
大阪大学	9(5, 4)	3(1, 2)
合計	34(13, 21)	17(8, 9)

る。最初の2回は取材活動を通して豊富な事例を知るジャーナリスト(女性と男性)に担当してもらったことにした。最後の3回目はまとめが要求されるので学問的な専門性と体系性を背景にもつ大学教師に担当してもらった。

講座1回の時間は1時間、計3時間の講座とした。ビデオなどの映像メディアを使った場合、30分以上にわたって受講者の注意を集中させることが難しいとされているので、1回の時間は双方向コミュニケーションを行う点を加味して1時間に設定した。

講座の内容はVSAT議長局とVSAT子局の各サイトにおいてビデオ収録した。これは、分析用として講座スペックの改善や講義方法の改良を行ったり、プレゼンテーション用として短時間のビデオ教材を編集するために収録した。

上記の日程にそって図1では、VSAT議長局とVSAT子局のそれぞれ2台のモニター画面上に現れた画像の例と、テキストから抜粋した講師の話題の例を提示した。

4. 実験の結果

以下では、受講者に対して実施したアンケート結果から、今回の講座内容に関連して「通信衛星の教育利用を効果的にするためにどのような問題

点があるのか」について評価してみた。

4.1 受講者数

表2にはVSAT子局の協力大学ごとに受講者数を示した。受講者には連続3回参加を条件に応募してもらうことを募集ポスターに明記した。その結果、応募者28名、応募締切後の参加者15名の計43名となった。このうちアンケート回答者が34名、さらに3日連続受講者については17名となった。この数字では統計的な分析にたえるものではないが、データ自体は貴重なものとする。

当初は100名程度の受講生が確保できると見込んでいたが、大学の授業に支障をきたさないために11月下旬の午後の遅い時間帯に設定せざるをえなかったこと、受講生募集をポスター掲示という消極的な方法で行ったこと、などが原因で予想を大きく割ってしまった。なお、4つのVSAT子局のうち東京農工大学はかなり抜きでた数字になっているが、これは大学の教職員による積極的な募集の努力が実った成果である。

4.2 アンケート結果

アンケートの設計段階では3回連続受講者を対象とした。しかしながら、実行段階では、項目の性質も考慮にいれてすべての受講者に実施した。その質問は以下の6項目から構成された。

受信画像の例	講師の話題の例
<p>《放送教育開発センターの場合》</p>  <p>11月20日留学生も参加</p>  <p>東京農工大学生からエール</p>	<p>「現在の女子学生のみなさんは、キャンパス内での女性差別を感じているのでしょうか?・・・(中略)・・・。私がある女子大で行ったアンケートで『女の子で得をしたことは?』の問いに『にっこり笑えば、大抵のことは何とかなる』という回答がありました。差別なんて感じてないのか、差別を逆手にとっているのか、ちょっと分かりません。総じて、若い女性が学校に在る間はあまり差別は自覚しない、あるいは差別感薄いと感じていいでしょうか。」</p> <p>「社会に出ようとして、まず女性が平等でないのに気づかされるのは就職のときです。多くの分野で女性の進出はまだ抑えられています。新聞産業もその一つ。日本新聞協会の調べでは、日本の新聞記者の総数のうち女性の占める割合はわずかに8%強です。・・・(中略)・・・。日本はよその国と比べても本当に低い。香港などジャーナリストの半数以上が女性。中国は3分の1くらい。韓国が日本と同じくらいということでした。欧米と比べればもっとはっきりと日本の遅れが浮き彫りにされるでしょう。」</p>
<p>《北海道大学の場合》</p>  <p>講義中の松本侑壬子講師</p>  <p>受講者は1人だけど、熱心に質問</p>	<p>「なぜ女性記者が必要か—女性の働く権利の問題にも増して、その内容との関わりも見過ごせない。新聞の読者の半数以上が女性です。宅配される新聞購読の決定権は主婦が持っている場合が多い。男の職場として長い伝統をもつ新聞には、記事の取り上げ方、用語の使い方にしても女性の視点で観ると首を傾げるようなものがあつたり、逆にもっと取り上げてほしいのに見過ごされている面も多い。両性で成り立つ社会を映す新聞には、両性の目が必要なのは言うまでもありません。」</p> <p>「若くて、未婚で、新鮮(未熟)なうちは、会社のなかでは生きやすい。何も知らないからこそ周囲は親切に教えてくれる。・・・(中略)・・・。しかし、だんだん仕事に慣れ、自分で考えて動くようになると男性の優越感と女性の向上心との間のバランスが崩れ始める。さらに仕事上の男性のライバルになったり、無視されて孤立したり、で女性の頭上に張り巡らされた『ガラスの天井』に気がつくようになるのは、大体20代の終わりごろから30代の初めにかけてではないでしょうか。女性労働の本当の問題は、それから始まるのです。」</p>

図 1-1 SCS 講座当日の受信画像と講師の話題の例(第1回)

受信画像の例	講師の話題の例
<p>《放送教育開発センターの場合》</p>  <p>講師からの質問に挙手で答える大阪大学の参加者。 「料理のできる人は？」</p>  <p>講義の後の質問の時間。 北海道大学で</p>	<p>「新聞社は男の世界—超男性社会のマス・メディア ＜家事・育児は夢のまた夢＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意識的に努力しても、物理的に不可能な長時間勤務 ・子どもの病気で遅刻すると『カミサンは何をしているのか』『カミサンを食わせるだけの給料は出ているはず』という上司 ・男性記者の共働きはごく少数(93年調査—共働き男性記者は全体の20%)—スウェーデンでは男性記者の育児休暇は当たり前 <p>＜記者は男の仕事?＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見渡せば男ばかり(95年調査・女性記者は8%) ・『男らしさ』の価値観(闘う男、強い、攻撃的、競争、忍耐、タフ、寡黙)から『記者は、女にはできない仕事』と決めつけてきた歴史 <p>「何のために記者になったのか—仕事の中身への疑問 ＜男の価値観による性差別表現＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男は仕事、女は家事・育児のニュース価値観 <p>1989年4月・東京『女子高生コンクリート殺人』事件の読売報道 ＜5少年“寂しかった家庭”/カギっ子→夜遊び→高校中退→非行…＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女と男を入れ替えたら <p>＜男心悲し/夫の座狙い/愛人の若夫絞殺/32歳男教師/男性独特の自己中心的性格＞</p> <p>＜女心悲し/妻の座狙い/愛人の若妻絞殺/32歳女教師/女性独特の自己中心的性格＞</p>
<p>《北海道大学の場合》</p>  <p>表情はにこやかだけれど、語り口は辛い山口講師</p>  <p>積極的に質問する農工大の学生</p>	<p>「全力疾走の果てに一仕事人間のハードル・その1 ＜滅私奉公の企業社会＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非人間的長時間労働 ・上司の命令は絶対 ・激しい競争社会 <p>＜行き詰まる企業戦士＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過労死=企業戦死(推定・年間1万人)、40~50代の自殺、心の病の急増 ・リストラで否定されるアイデンティティ ・環境破壊・バブル経済で問われる『仕事の中身』 ・それでも行き詰まりを打破できないのは? <p>①『男らしさ』に縛られて一男の沽券、家族のために ②生活転換・価値観転換への怖さ</p> <p>「『男らしさ』にこだわらない生き方—男が変わる手がかり</p> <ul style="list-style-type: none"> ①自分をまっすぐみつめれば、自分の本当に求めているものが見えてくる ②暮らし方を変える=家族との関わりを見直す ③働き方を変える=職場を変える—男社会への異議申立て ④地域を変える・社会を変える—男も女も自分らしく生きられる社会へ

図1-2 SCS 講座当日の受信画像と講師の話題の例(第2回)

受信画像の例	講師の話題の例
<p>《放送教育開発センターの場合》</p>  <p>講師がみた熱心に受講している受後者の画像</p>	<p>「最近、性を扱う議論のなかで、セックスとジェンダーという二つの概念をよく見かけるようになってきました。セックスは生物学的な性の在り方を意味します。これに対して、ジェンダーの方は、文化的・社会的・心理的な性の在り方を指す言葉です。」</p> <p>「だから、もし、このジェンダーという面での性の在り方が、私たちの生活にとって不都合なものであれば、人間の意志によって変更を加えることができるということです。そして、現在、女性たちの声は、現在のジェンダー状況が、彼女たちにとって不都合であることを告げてきたのです。女性の前に存在してきたハードルを越えるとき、大きな問題は、このジェンダーの仕組みをどう考えるかということだろうと思います。」</p>
 <p>大学の先生にも関心の高いテーマであった。</p>	<p>「『これからの社会は、『男(だけ)が仕事、女(だけ)が家事・育児』という構図を越えて、男性も女性も、就業を含む社会活動、家庭生活、コミュニティ活動を、それぞれバランスよく行える方向に転換していくことが必要でしょう。男性の家庭・地域参加と女性の社会参加の拡大が望まれます。そのためにも、私たちの意識のなかにある固定的な性別役割意識を変え、『男はこう』『女はこう』というジェンダーの縛りから自由な、ジェンダー・フリー社会の成熟が、これからは大きな課題になることでしょう。」</p>
<p>《北海道大学の場合》</p>  <p>短期講座を総括する伊藤講師。</p>	<p>「ただし、こうした男性にとっても女性にとっても、社会参加・家庭参加・地域参加がバランスよく保証できる社会を生み出すために、ここで一つ重要な課題があります。それは、女性が「産む性」だという問題です。・・・(中略)・・・。そして、この『出産』という身体的機能が、しばしば、女性の社会参加の拡大の大きなハードルになってきました。だからこそ、『女性差別撤廃条約』でも、婚姻または出産を理由に女性が差別を受けることを防止することや、女性の産む機能を保護することは逆差別にはあたらないということが、はっきりと書かれています。・・・(中略)・・・。さて、みなさんは、このジェンダー・フリー社会の実現のために、どんなことが必要だと思いますか？」</p>
 <p>講師の質問に積極的に答える東京農工大の男子学生。</p>	

図 1-3 SCS 講座当日の受信画像と講師の話題の例(第3回)

表3 以下の言葉を以前に見聞きしたことがある人

知識項目	受講者全員	総理府調査結果
男女共同参画会	20.6 %	10.3 %
男女雇用機会均等法	100.0 %	71.9 %
女子差別撤廃条約	55.9 %	27.8 %
ジェンダー	41.2 %	2.2 %
家族的責任条約 (ILO156条約)	2.9 %	5.0 %
リプロダクティブヘルス・ライツ (性と生殖に関する女性の健康・権利)	5.9 %	3.8 %

- (1) 講座テーマに関連する受講者のレディネスの程度をみる項目
- (2) SCSの画像・音声の見やすさ・聴きやすさに関する項目
- (3) SCSによる講義への抵抗感に関する項目
- (4) 講義の方法に関する項目
- (5) 講義内容の効果に関する項目
- (6) 受講後の感想など自由記述欄

アンケートの結果は表2~6にまとめた。上記の項目(1)から(3)及び(6)は項目の性質上,34名の受講者についての情報を表示した。そして項目(4)と(5)は3回受講者17名のみでの情報に限定した。

4.2.1 受講者のレディネス

さて「女性と社会参画」講座は,基本的にはこうした内容にあまり接する機会のない学生層に向けた入門編として企画したが,そのことは受講者に事前の知識を要求しないということであった。

それが実際にはどうだったかを見るために,講座テーマに関する基礎的な言葉について「以前に見聞きしたことがあるか否か」のレベルで尋ねてみた。

ちなみに,これらの言葉は,総理府広報室が全国の20歳以上のものを対象に行った「男女共同参画に関する世論調査(平成7年度)」において,その周知度を尋ねるために掲げたものと同じであり,その結果についても表のなかに参考として示した。

結果は表3に示すように,男女雇用機会均等法は全員が見聞きしたことがあり,女子差別撤廃条約は約半数,ジェンダーは約4割であった。この結果を先の総理府の世論調査結果と比較しても,このテーマに関する知識面のレディネスについては少なくとも我々の想定した対象集団より高いと推察できる。

4.2.2 画像・音声の見やすさ・聴きやすさ

協力大学に設置されたVSAT子局の部屋は,教

表4 衛星の画像・音声について

教室のモニター画面は見やすかった	82.4%
音声はよく聞き取れた	94.1%

室の広さ,モニター画面の位置や見やすさ,モニターカメラの位置,等の条件が一樣ではない。今回の受講者は大集団ではなかったので,大教室の場合でも場所によって見やすさや聴きやすさが変わるという心配はなかった。表4の結果はそのことを示唆している。しかしそれを前提にした場合に,モニター画面についての回答が8割程度というのは,そこに改善の余地があるように思われる。

4.2.3 講義への抵抗感

すでに予備校において衛星を使った遠隔授業を経験した者はいた。しかし,全員が大学での衛星による講座受講の経験は今回が初めてであった。衛星というメディアを使った新しいスタイルなので,もの珍しさで受講する者がいる一方で,対面授業の経験と比較してももの足りなさを感じる者がいるかも知れない。今後のSCS講座スタイルを普及していく上ではこうした衛星メディアについての違和感,とりわけ抵抗感の存在の程度について確認しておくことが大切と考えた。

表5に示した結果をみると,「講師を身近に感じた」という項目がほぼ9割を占めた。講師と受講者のコミュニケーションを図るには衛星メディアでもなんら支障がないことがわかる。しかし,「他大学の学生を身近に感じた」については比率が4割に落ち込んだ。「感じなかった」とする回答の多くはモニター画面を1画面で運営した東京農工大の受講者であるところを考えると,どうやらその落ち込みの原因は衛星メディアのスタイル

ではないように思われる。また「この授業スタイルに違和感をもった」とする回答は3割であり,それほど多くはなかったが,やはりある程度は違和感を感じる人達が存在することがわかった。

対面授業のスタイルとの比較については,その特徴を浮き彫りにする意味で,「通常の授業スタイルと比較していい点」を尋ね,さらに肯定的な回答についてはそれを具体的に記述してもらうことにした。

その結果,9割に近い人達が肯定したが,その比率の内容を分析した結果と合わせてみると,遠隔地にいる貴重な講師が共有できる,受講者の意見の多様さが楽しめる,参加がしやすい,討論形式での活用にも有効,といったメリットが指摘されていることがわかった。

4.2.4 講義の方法

SCS講座の場合には,通常の対面スタイルの講義方法とは異なるスタイルが要求されるというのが今回のわれわれの出発点であった。その異なったスタイルは,「一講座の時間の長さ」,「全体の講座の回数」,「教材の提示方法」,「講師の話しの内容のレベル」,「一方通行にならない講義の工夫」の5点に配慮して創ってみるということであった。

表6はその5つの点について評価を求めた結果であるが,「1時間の受講時間が適切であったか否か」は賛否両論に分かれた。「そう思わない」という評価は「質疑応答を入れたこのスタイルでは時間は短い」というコメントを寄せた受講者がい

表5 衛星を仲介した講義スタイルについて

この授業スタイルに違和感を持った	29.4%
講師を身近に感じた	88.2%
他大学の学生を身近に感じた	41.2%
通常の授業スタイルと比較していい点がある	85.3%

(具体的な意見)

- ・眠ったりしない,集中できる,発言しやすい,聴きやすい
- ・一方通行でない,遠隔地の研究者の話が聞ける
- ・発言がしやすい,話が記憶に残りやすかった
- ・学生に質問する機会を与えてくれた
- ・色々な意見がとびかって面白かった
- ・意見の交換がしやすくてよい
- ・参加しやすい
- ・色々な大学を身近に感じた
- ・多忙な方の講演が生で見れる
- ・遠距離間での情報や意見の交換
- ・他大学の講師の講義を聴ける
- ・専門分野の方の話聞くことが容易になる
- ・討論形式の授業には有効である
- ・多種多様な話が聞ける
- ・遠い所にいる人たちと同じ会場にいるように話し合える
- ・貴重な講師を共有できる,意見を広く求められる
- ・受講者の数が総体として増える
- ・映像と音声の間近で受講できる
- ・真に授業を生かして聴く学生にとって無駄が少なくてよい

表6 講義方法について(100% = 17名の3回連続受講者)

項目	そう思う	わからない	そう思わない
一回の受講期間が適切であった	47.1%	5.9%	47.1%
講座の回数も適切であった	70.6%	0.0%	29.4%
事前配布の受講用資料が役に立った	88.2%	11.8%	0.0%
どの講師も説明はわかりやすかった	76.5%	0.0%	23.5%
どの講師も一方的に話してばかりいた	17.6%	5.9%	76.5%

表7 講義を聴いて感じたこと

項目	N = 17 (連続受講者)
内容は自分にとって新鮮だった	35.3%
社会での女性のおかれている状況を改めて知った	35.3%
社会での男性のおかれている状況を改めて知った	35.3%
ジェンダーという視点を学ぶことができた	41.2%
男女の生き方について日頃の自分の考え方に揺さぶりをかけられた	23.5%
男女の生き方について日頃の自分の疑問に答えてくれた	17.6%
男女の生き方について日頃の自分の考えに自信がもてた	35.3%
自分自身の心のなかにあるハードルに気がついた	11.8%
自分の将来の生き方に対して勇気がわいた	23.5%

たことから推察して、時間の短さに不満を表明した人達であるようだ。「全体の講座の回数」については7割が肯定的な解答を寄せてくれた。もし3回より長い回数になるとこの比率は下がるのではないかと考える。

教材の提示方法については、今回はモニター画面のなかでは提示せず、事前に各講師自作の印刷教材を配付した。その意味は3つあった。一つは2つあるモニター画面には講師といずれかのサイト(子局)の受講者が常に映っており、モニター画面での教材提示でその状態が変化しないようにするという、双方向性の効果をできるだけ生かすためである。2つ目はモニター画面での教材の見やすさは各サイトによって異なるので、その点を配慮したことである。3つ目は映像による効果は印象のレベルに留まりやすいので、後で知識を正確にしてもらうためにも印刷教材を提供しておくということであった。結果は「役に立った」という回答が9割に近い。どの意味で役に立ったかはわからないが、少なくとも印刷教材の必要性は認められたと考える。

講師の説明については、具体的な事実に即して話しを進めてほしい、入門レベルでいいから難しい専門用語はあまり使わない、という原則で願

いした。結果をみると、7割以上の者が「わかりやすかった」と回答している。「どの講師も」という厳しい条件での評価であるので、それほど低い比率ではないと思う。「そう思わない」という2割余の回答者のなかには、「テーマに関連しない話しが長かったから」という感想を述べた者がいたように、テーマと話しの筋立てに微妙なズレが生じると、内容がわかりやすくても評価が下がるということであろう。

講師の話し方については、一方的に話すことはしない、話しの途中でなるたけ質問などを挟んでほしい、といったコミュニケーション型の講義を注文しておいたのが効を奏したと思うが、「どの講師も一方的に話してばかりいた」には7割以上が「そう思わない」に回答してくれた。もっと比率が上がってもよいと思うくらいだったが、「どの講師」という条件だとこの比率になるのだろうか。

4.2.5 講義内容の効果

講座の教育的な目標の達成、すなわち社会的感受性がどのように喚起されたかを受講者の自己評価で調べてみた。

社会的感受性の項目は表7に示したような9項

表8 自由記述からのコメント(辛口部分を主として)

- ・ 普段,聴くことの出来ないお話を拝聴できた。少人数だからこそ質の高さが保たれたが,多勢だと質疑応答のメリットが減るのでは。講師とだけでなく大学間の対話もできるとうれしい。
- ・ 今回のような発言が求められる講義では,やはり時間が少ない気がした。
- ・ とても身近に先生が感じられた。色々な意見が聞けるのがすばらしい。
- ・ 女性の社会進出におけるハードルの意見は聞けたが,専業主婦の立場についても意見を聞きたかった。
- ・ 話題は興味深く適切であったが,画面を介することはダイレクトでないが故に印象の薄さはどうしようもないように感じた。
- ・ 大学間の対話がなく,必ず講師の先生が媒体に入るのが残念。
- ・ SCSだから特別に良かったとは思えません。結局は内容がいいかどうかだと思います。こういう話に関心があるので受講したが,本当は関心のない人決まった考え方しか持ってくれない人に聴いて欲しかった。
- ・ もっと深い内容(専門的な)を望みます。今回のものは体験談も聞けて参考になったが総括が甘いように思います。
- ・ このテーマを討論形式(性格には質疑応答であって討論ではありません—要約者注釈)で扱うには一回一時間という枠内では難しいのでは。各講師が討論を意識して質問されていたので,話の流れについていきにくくなる場面が何箇所もあった。円滑に内容を進行させるために,全体の司会を設けることを提案する。
- ・ 遠隔地を結んで一つの講義を受けられるのは嬉しいが,講師対聴衆の形式でなく,全体が同時に議論しあえる臨場感がある方がよい。
- ・ 通常の講義と比較すると,(a) 授業後に質問できない,(b) 出欠とかはどうする,(c) 必ず事務の方が授業に立ち会うのか,などの疑問がわきました。

目から構成した。結果をみると,17名の連続受講者は全員が少なくとも1つの項目を選んでくれた。そのなかで,4割の者が選んだのが「ジェンダー(社会的歴史的につくられた性役割)という視点を学ぶことができた」の項目であった。今回の入門講座の狙いはまさにこのジェンダーの視点を知ってもらうことであったのであるから,これは期待通りであった。ただし,その割には4割というのは低いのではという声も聞こえそうだが,これはジェンダーを既知の事柄とした受講者も多くいたのが理由である。そのために,他の多くの項目に選択が分散しているのが特徴としてみられ

る。

ちなみに,「内容は自分にとって新鮮だった」,「社会での女性のおかれている状況を改めて知った」,「社会での男性のおかれている状況を改めて知った」,「男女の生き方について日頃の自分の考えに自信がもてた」の各項目はいずれも3割を超えている。

とくに「男女の生き方について日頃の自分の考え方に揺さぶりをかけられた」,「自分の将来の生き方に対して勇気がわいた」という項目への選択は大きな比率ではないが,どちらも社会的感受性の喚起という目標からは,企画者として大変有り

難い反応であった。

4.2.6 受講後の感想

アンケートは10分程度で記入が終えられるように設計したが、最後に設けた自由記述欄への記入のために5分から10分程度延長したケースも幾人かあった。いずれも熱心に記入してくれたことによるが、表8には自由記述のなかで次回のSCS講座を企画する上で参考になるコメント部分のうち、とくに辛口部分を中心に要約してみた。

寄せられた意見をみると、質疑応答を採り入れた講義法は基本的には講師対聴衆の図式を超えていないことへの不満、マス集団に対するSCS講座の効果に対する疑問、質疑応答形式においては講師以外の司会役の役割が必要であることの指摘、講義後のインフォーマルな対話の重要性、そしてSCSを通して何をどの対象者に発信するかという講座内容の質の大切さ、が示唆された。

5. 考察

放送教育開発センターとして実験的に行ったSCS短期講座は、一言で述べれば、学習者ニーズをベースにした双方向の遠隔学習、すなわちオープン・ラーニングの枠組みのなかでの企画であった。しかし、実験の当初はオープン・ラーニングは概念のレベルでの理解にとどまり、その概念に対応する具体的な講座内容は明確な像とはなっていないかった。

したがって今回の実験結果を踏まえた場合、本論文の冒頭で述べた目的の一つ、「放送教育開発センターが主体的にVSAT局の一つとなって他の大学と双方向の遠隔講座を行うにはどのような問題があるのかを探ること」は、むしろ「オープン・ラーニングの一環として放送教育開発センターが企画するSCS講座にはどのような具体的な選択肢があるのかを考えてみる」という問に換えるほうが適切だと考える。

この問に対するわれわれの議論の結果は、SCS

遠隔講座に対する大学側(学習者も含めた)のニーズは「遠隔講座の内容」に対するニーズとして把握したほうが明確になるということであった。この仮説に基づき次頁のような「SCS遠隔講座内容の種類」に関する分類枠組みを試作した(表9)。

試作の分類枠組みに即して説明すれば、今回の「女性と社会参画」講座は「(c)教養(生活)関連講座」のカテゴリーに入る。もちろん、講座の企画にあたって学習者のニーズについては「市場調査」した結果に基づいてはいないが、社会的なニーズを背景にした点、それから大学の授業科目として開講されにくい状況を斟酌した点に、学習者ニーズを間接的に反映させたという説明が許されるかも知れない。

いずれにしても、大学支援のオープン・ラーニングの一環としては、放送教育開発センターによるSCS講座の今後の展開は、上に示したような「遠隔講座の種類」に応じた講座内容のニーズ調査を踏まえながら組織化されていくことが重要かと考える。

つぎに2番目の目的である、「通信衛星の教育利用を効果的にするためにはどのような問題があるかを明らかにすること」については、SCSのメディアの特徴を有効に活用するためのポイントを中心に、問題点も合わせて述べてみる。

SCSは通信衛星によって伝える双方向テレビ会議システムといえるが、今回のSCS短期講座を実施してみて改めて実感したメリットは、この双方向テレビ会議システムを通じたメディアの双方向性とライブ性という2点であった。

講座スペックを作成する段階で、講師に質疑応答を積極的に採り入れることを指示したり、一方的に話しをせずに受講者とのコミュニケーションを意識するよう要求したのは、「女性と社会参画」という講座の性質を勘案した点、およびシステムの双方向性を活用するという視点があった。

双方向性の利点は具体的には、講師にとって「学生が目の前に見える」学生反応がじかに見

表9 SCS 遠隔講座内容の種類に関する分類

SCS遠隔講座内容の種類	講座の性質	センターの役割
(a)大学の授業科目	各大学の単位として認められる科目	大学間単位互換の最良 大学等
(b)サブメント講座	単位には認められないが、正規の授業科目に関連して開講されるプレラトリー的な科目	大学間共通講座の最良 大学等
(c)教養(生活)関連講座	社会的なニーズや学習者のニーズに応じて開講される講座	大学間共通講座の最良 センター企画可
(d)研修(職能アップ)講座	職能の遂行や向上に必要なものとして開講される講座	大学間共通講座の最良 センター企画可
(e)フレッシュ・アップ講座	一度遠ざかっていた専門の内容を強化させるために開講される講座	大学間共通講座の最良 センター企画可
(f)キャリア・トランスファー講座	専門以外の新しい分野の内容に挑戦させるために開講される講座	大学間共通講座の最良 センター企画可

える」ということであった。学生の顔が見えないことは、放送大学への出演講師に対して実施したアンケート調査結果^(注3)では、「教室での授業とちがってやりにくいこと」の最大の要因として掲げられていた点であった。今回の講座終了直後に講師に対して行ったインタビューでも、3名ともにこの点を積極的に評価していた。学生が理解しているかどうか自分の目で確かめながら講義ができるという遠隔授業における双方向性は、講師にとってそのメリットは大きい。

さらにSCSシステムの双方向性に加えて、SCSメディアのライブ性を活かすという考え方も新たな利点として浮上してきた。

例えば、SCSメディアのライブ性を積極的に活用すれば、「何が起きるか分からない」という部分を意図的に作りだすような講座スペックの設計観も可能となる。このライブ性を意識することで、講師と学習者の質疑応答は、双方向コミュニケーションを実現する一つ的手段だけでなく、講座の質に係わる成果の一部を創り出す手段として活用することもできる。

教育の基本はフェース・ツー・フェースのメディアであるとされるが、それもメディアの特徴が有効に活用されての話であり、自動的にその有効性が保証されているわけではない。しかも教師個人の技量に負うところが大きい。これに対し

て, SCS という双方向テレビ会議システムは, 既存の伝統的な授業形態の延長線上で活用することができる上に, チームとして講座内容あるいは授業内容をつくりあげることが基本にすれば, 伝統的な一教師の授業では不可能な講座内容や方法を創り出すことも可能であろう。

しかし SCS のこうした有効利用の可能性も, 現段階では, 各大学での SCS のメディア機器に対するアクセスの不便さの問題, 講座内容の質に即して利用のノウハウが蓄積され交換される態勢づくりの遅れ, などによって普及するにはもう少し時間がかかりそうである。

注

1. SCS では, 当該のセッションの参加局 1 グループで利用できる衛星回線は, 2 チャンネルとなっている。そのため, 3 局以上が参加の場合, 各 VSAT 局からの送信にあたっては, この 2 チャン

ネルを切替えて共有することになる。通常, 参加局のうちから議長局を決めて, 1 チャンネルを優先的に使用し, 残りの 1 チャンネルを各子局で持ち回りする形態がとられる。その際, 議長局では, 持ち回りチャンネルの切替の制御も行う。なお, 2 チャンネルの受信については, 各 VSAT 局で常時可能である。詳しくは, 近藤喜美夫 (1996), 「VSAT の大学間教育交流ネットワークへの応用」, 『電子情報通信学会誌』, 79 (8), 777-782 を参照していただきたい。

2. Tony Bates (1995), *Technology, Open Learning and Distance Education*, Routledge, p.14 では, メディア利用の教育においては少なくとも Subject Experts と Media Specialists と Instructional Designers の 3 者がチームとして必要と指摘している。

3. 瀬田智恵子 (1996), 「演出技法に関するアンケート調査から - 放送大学授業番組出演経験者の意識 - 」, 『放送教育開発センター研究報告』, 12 号, 107-131